

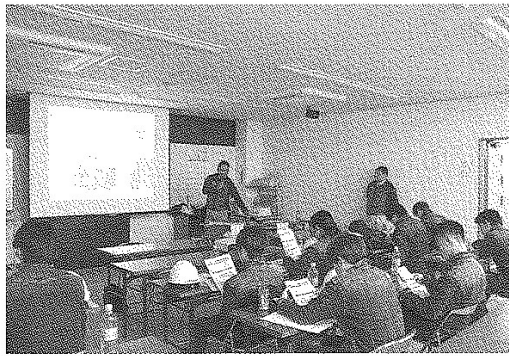
宇管工 県央産技校生に実技指導

分水作業の留意点を伝授

宇都宮市管工事業協同組合(中村勝理事長)は5日、平出工業団地の管工事会館で、県立県央産業技術専門校の建築設備科1年生10人を対象に「水道本管からの分水工事の講義と実技指導」を開催した。企業技術者が訓練生へ技術を伝授し、就業意欲の向上と設備業に携わる人材育成につなげるのが狙い。宇管工は青年部会(福富昭部会長)の11人が指導した。県央産技校への技術指導は2022年から3回目。

座学は黒崎丈博青年部理事が講師を務め、水道の大切さを説明。宇都宮の水道の歴史は1916年に通水を開始。法令の51項目を上

能登半島地震の水道応急復旧第1陣の画像を上映。水は命の源であり、最も復旧を急ぐべき。地盤の緩い砂礫層を掘削し、水漏れ部



青年部会が訓練生を丁寧に指導した(上)、給水の仕組みの座学を受講

分の配管を復旧。応急的に配管を道路の上に這わせ、地下に埋設せずに通水を再開。組合では近く、第3陣を派遣する。10分間の「サドル付き分水栓の取り付け工事」の動画を視聴後、訓練生は敷地

内の実技会場で分水管の取り付け、穿孔、通水作業を体験した。建築設備科の1年生は8人が高卒後の19歳、2人が20代前半。授業では現場技術者と直接触れ合う機会は少ない。

古沢和夫教授は「能登半島地震を踏まえ、水は人々が生活する上で欠かせないライフラインということを改めて自覚したはず。就活を始める中で、設備業にプライドを持つて進んでほしい。現場技術者から直接指導を受けたのは大きな成果」と講評した。